

## 光明

人は光明がなくては生きられぬ。であるから、人は何かに光明を認めて生きているのである。光とは何であるのか。君が光と言うのは何であるのか。その答え一つが君の価値を決定するであろう。

貧しい者には金こそ光である。何とか生きて行けるものにとっては、名利の満足こそ光である。病む者にとつては全快こそ光である。そして君にあつては何が一体光なのであろうか。

光を求める者は、自らが暗黒の中にいることを感ずるがゆえである。暗いから、光を求めるのである。甲は金の中にいるから安心を感じ光を感じている時、乙は金の中にいつつ不安を感じ闇を感じるのである。であるから、暗やみを感じるといふことは、その人の精神生活の深さに比例するのである。

動乱そのものの人生にあつて不安を感じず、悩みを感じず、苦しまずして生きてゆけることが、凡夫の悲哀である。悩まず、苦しまず、求めないがゆえに、真の光明が何であるかを知ることができない。悩みに打ち当たつたものは幸せである。人生の暗黒が身にしみて感ぜられる人は幸せである。

人の世の光となつた人たちは、皆、人の世の闇に泣いた人たちであつた。普通の人気が平気で通られた問題を平気で通れなかつた人である。人生をいい加減にごまかして通れなかつたのである。生とは何であるか、死とは何であるか、愛とは何であるか、道とは何であるか、人格とは何であるか、自覚とは何であるか、何一つとして解決がついてはいないではないか。

しかるに我等は、親鸞聖人の法流ほつぷに遇うことが出来て、光明とは何であるか、無明の黒闇とは何であるか、自覚とは何であるか、人格とは何であるか、道とは何であるか、等々の問題を一つにして、生死の一大事、後生の一大事となし、これを信の一字において解決し、念仏一行として我らの上に廻施して下さつた。

念仏したとて苦しみが無くなるのではない。念仏したとて悩みが少なくなるのではない。正しく真に苦しみ悩むことを教えて下さるのである。ほんとうの苦しみ方、ほんとうの悩み方のなされるところには、深い光がある。たとい人生を樂天化してゲラゲラ笑つて過ぎしても、それが至極淺薄なものであり、正しいものでないならば、その楽しみには深い闇が裏づけられている。

万世を照らすような光、万人をつつむような深い光、そうした不滅の光明を仰ぎたい。だれに知られなくてもいい、どんな苦悩の中でもいい。永遠の常住の光明を仰ぎたい。それが万人の心の底の願ひではないか。

暗深きに驚くことなかれ。暗深ければ光明も深し。念仏道においていよいよ不滅常住の光明の無限なるを知ることである。